

出雲大社：創建

「出雲大社と神々の国のまつり」の展示は、博物館に隣接する出雲大社の歴史、建築、祭祀などをテーマにした展示です。出雲大社の主祭神であるオオクニヌシノカミは、農業、国造り、縁結び（人と人の絆）の神でもあります。縁結びの概念は、夫婦や隣人、同僚との関係だけでなく、農家の収穫の成功など、人々の日常生活における良い結果も含んでいます。

出雲大社の創建は定かではありませんが、古事記や日本書紀に登場する国譲り神話にその起源を見ることができます。また、出雲国風土記には、神社の創建神話が記されています。いずれも 8 世紀頃のもので、出雲大社が古くから大切にされてきたことを物語っています。

出雲大社は幾度となく再建されてきましたが、本殿は古代の住居を基にした大社造りの様式が一般的です。大社造りは切妻屋根で、妻側（建物の短辺の一つ）に階段でつながる入口があり、これを妻入りと呼びます。また、大社造りは柱を立てて床を高くしています。博物館の展示室には、このような高床式の建築様式を示す貴重な遺物として、紀元前 1 世紀頃の土器があります。この土器は、隣接する鳥取県で出土したもので、柱を立てた長い階段で上る建物が描かれています。

このほかにも、出雲が弥生時代（紀元前 300 年～西暦 300 年）から特別な意味を持っていたことを示す資料がいくつか展示されています。例えば、弥生時代の巴形の玉（勾玉）と青銅製の戈（銅戈）が大社の近くで出土しています。勾玉は北西日本にある現在の新潟県で、銅戈は西の本島、九州北部で作られたものです。いずれも大変な距離を移動したもので、古代における出雲の重要性を物語っています。さらに、近隣の遺跡から発見された弥生時代の銅鐸や銅剣の祭祀の埋葬が、より強力な証拠となっています。

古代の本殿は、高さ 48 メートルの壮大な建築物だったと言われています。10 世紀の貴族の子弟のための教科書『口遊』には、出雲大社が奈良の東大寺の大仏殿や京都の朝廷の行政機関の建物と並んで、当時の日本で最も高い建物であったと記されています。展示室の中央にある 10 分の 1 スケールの大型模型は、10 世紀当時の出雲大社の姿を表現しています。